

も、思ふに誤らないことであらう。併しながら世祖は例へば清朝諸帝の如く、自から儒學を修めた譯でもなく、格別支那の學術を尊重したとも思はれない。其の儒を重んじ、漢法に従つたについては、漢土を治める政策上から來たものが多分に存したことを見逃がすことは出來ない。鈔六文を盗んだ漢人は殺せといふ亂暴な旨を不用意の間に言ふたのが禍を爲して、大都の牢獄を賑はしたことがある。⁽²⁵⁾其の不用意の間に語られたかゝる事柄が、却つて政策を離れた本意を吐露するものと認められぬでもなからう。世祖に繼いだ成宗の如きも、或は郊祀の儀を正し元史成宗本紀、大德九年四月壬辰の條或は京師に文宣王廟を作り、釋奠の禮を行ひ同上、十年八月丁巳の條儒教尊崇の形蹟を示して居るが、その實かゝることは、漢民統治の上から中書省を初め臣僚の建議を容れたまでのことであつたらしく、實は漢人の説などを重視して居つたものではなかつたので

〔大德三年春正月〕己丑。中書省臣言。天變屢見。宜依故事引咎避位。帝曰。此漢人所説耳。豈可一一聽從

耶。元史成宗本紀

と記されて居る如きは、這般の消息を語るものと思はれる。たゞ儒學の教ふる所に對して、當時格別これと背馳する宗教的もしくは道德的の信條を有しなかつたと思はるる蒙古人、殊に專制君主たる元朝の諸帝がこれを退けねばならぬ謂はれはなく、その所説を聽けばどの天子もこれを善しとし、或は大學衍義の譯讀を聽いて、「治天下此一書足矣」元史仁宗本紀、大德十一年六月癸巳とか、或は孝經の譯本を讀んで「自王公達於庶民。皆當由是而行」元史武宗本紀、大德十一年八月辛亥とか謂

つたのは當然である。然も自から進みて儒學を究めるでもなく、またこれが爲に積極的の保護獎勵を圖つたとも思はれない。畢竟儒學を初め支那の文物を尊んだかの如くに見える點は、多くは漢地を統治する必要上からの政策に